孤独なロマンチスト

武田美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独なロマンチスト

【Ｎコード】
Ｎ２６１８Ｃ

【作者名】
武田美空

【あらすじ】
妖精が見えて会話できる、少しどころじゃなく不思議な女の子、浪漫千里の生涯の物語。

●はじまり●

●●●

変な奴だ。誰もがそう口にした。
不思議なひとだ。三人がそう言った。
なんて可愛いのだろう。二人がそう笑った。
ずっと一緒にいよう。二人と地球上の生き物が誓った。
君はひとりじゃない。一人が涙ぐんで抱きしめた。

浪漫千里がずいぶん大人になった、十一月のある日のこと。珍しく快晴であった。ここ最近、雲が頭上を覆う日々が続いていた。昨日、はらはらと雨粒が落ちる中、彼女は足元に水たまりが出来るのを見守りながら、濡れた木の葉を踏みしめた。

それからほんの十八時間で、ここまで真っ青な顔になった空。雲ひとつない。地上に広がる落葉した赤や黄色を引き立たせている。

女心と秋の空とは、よく言ったものだ。心変わりの早いそれは、すなわち浮気者そのものである。誰しも心の状態は、その時その時で変わってしまう。一分一秒が過ぎる間に、歳を重ねるごとに、色んなことを経験するうちに。

――が、千里は、まったく変わっていない。いつ頃と比較してそう断言しているのかというと、それは彼女がまだ四歳だった時代である。

●ナイショ●

●ナイショ●

千里はとにかく変わった子供だった。（良く言えば）個性的だった。良い意味で解釈する者もいたし、それは如何なものかと眉をひそめる人間もいた。様々な意見が出て、千里は愛されながらも怪訝な目で見られる不憫な子供だったのである。

前者で取ったのは祖父だけだった。お腹を痛めた母親より、嬉しそうに名前を考え、歓喜した父親よりも、彼は千里を溺愛した。だから千里の心がすさむことは無かった。

――妖精さんがいるの。

ことの始まりは、耳に入るコトバを、意味も解らず口にし出してしばらくしたある日のこと。千里はそんなことを言った。

妖精なんてコトバ、誰が教えたのだろう？　家族やいとこ、隣のおばさんまで、不思議がった。まだ教育上良くないだろうということで、テレビを見せることもしなかった。妖精が出てくる、ファンタジーな絵本も読み聞かせてはいない。ならば、どうして、千里は妖精だなんて口にしたのだろう？　母親は唸った。父親も頭を抱えた。隣のおばさんは飽きたのかさっさと帰ってせんべいをかじっていた。

「どこにいるんだい？」

そう問いかけたのは祖父だった。しわだらけの顔を孫に近づけ、目尻を緩めて千里の頭を撫でる。千里は静かに口を開いて、もう行ってしまった、ずっと向こうへ飛んでいってしまった、と宙を見つめながらぼやいた。

「……そうかい。良かったねえ、千里。きっと、妖精さんに会えたのは、千里が良い子だからだよ」
ぽかん、と周囲が呆気に取られ、このじいさんの血が隔世遺伝したのではないかと囁きあっていたが、お構い無しに二人は笑い合った。
「わたし、みた。ちょうちょの、はねに、のって、ようせいさん、こんにちは、ってわらった。すっごく、かわいかった」
あまりの興奮からか文節で切って話すわが子の扱いに困りながらも、両親はその内容に注目した。
どうやら、窓から入ってきたモンシロチョウの背中に、透明な羽を生やした、小さな小さな妖精がまたがっていたらしい。そこで、千里が声をかけると、妖精は、手にしていた魔法のステッキらしき物（おそらくマッチ棒くらいの大きさ）を振り、
『ぽんぽこぴんの、ぱらぱらぽん』
と、怪しげな呪文（だと思いたいが）を唱えた後、千里に向かって、
『いい子にしていれば、また会えるわ』
そう言って笑ったという。呪文は理解できない上に、なんのために呪文を唱えたのかもさっぱり意味が分からなかった。というより、そもそも想像出来ない話だ。まして、妖精なんてものは人間が創り出した、架空の存在。実際にチョウの背に乗りやって来るはずがない。しかし、わずか四歳の子供にそんな現実を突きつける訳にもいかず、みな、黙って祖父にその場を任せることにした。
「千里、なにか魔法をかけられたかい？」
引きつった笑みを浮かべて、父親は千里を抱き上げる。冷や汗が頬を伝うのを誰もが見守った。――っていうか、四歳児の可愛い想像くらい受け止めてやったらどうなんだ、親父。
そんな周囲の心配も知らずに、きょとんとした顔で、彼女は言ってのけた。
「ナイショッ」

――この日から、千里のめくるめく浪漫溢れる日々は始まったのである。

●ダン子ちゃん●

●ダン子ちゃん●

周囲からの千里のイメージが、なんとなく『空想・想像・妄想』で決定づけられてしまったあの日から6年。彼女は小学4年生になり、相変わらずの日々を送っていた。

しかし、6年という年月は意外と長いもので、その間に愛する祖父は天使になり、何だかよく分からないが天国でハーモニカを吹き続けているとか何とかかんとか。もちろん、この発言は千里によるものである。

「やあーい、やあーい！　ロマンチスト、ロマンチスト！　浪漫千里はオバケが見えるぞお！」

――うふふ、オバケじゃないよねぇ、妖精さんだっていうのに、阿部くんったら。そう、私の隣の席の子だよ。まったく、馬鹿でアホで顔も見たくないったらありゃしないよね、あはは。

ずいぶん酷いことをとろけそうな笑顔で言ってのける千里は、やはり6年経っても千里である。それよりも阿部くん、ロマンチストの意味を知っているのかな？

「おい！　無視かよ！　ひとりで何をブツブツ言ってんだよ、このロマンチスト！」

――え？　うるさい上にうざったいから、魔法で消しちゃうって？ふふっ、駄目だよ、それなら私がやるよぉ。それに、そんな下らないことに魔法を使うなら、駅前のケーキ屋さんのモンブラン百個出して！　おいしいんだよぉ。

さりげにずいぶんなことを交える彼女は、やはり浪漫千里である。うん。

「おい、こら！　浪漫、聞いてるのかよ！」

振りかぶって――投げた！　阿部の見事なストレートが浪漫選手の後頭部にヒット！　浪漫選手、泥が洋服にまで飛び散って、大変なことになっております！

――と、泥ダンゴをぶつけられて、ようやく千里は振り返った。

妖精

との会話を中断したらしい。昨日は運悪く雨だったため、千里に当たったボールは、充分すぎるほど水分を含んでおり、首筋から服の中までびちゃびちゃ、どろどろになってしまった。

「わあ、妖精さん、濡れなかった？　――そっか、良かった！　えへっ」

はい、マイペースな千里さんです。やはり6年経とうと、何年過ぎようと変化の様子を見せない。

いじめっ子でガキ大将の阿部くんが暇を持て余していたせいで、すべては始まった。

体育館裏にある桜並木の下で妖精と世間話をするのが日課となっていた千里は、いつものように根元に座り込んで、他人には見えぬ存在に話しかけていた。

話が弾んできた頃、千里のスニーカーに登ってきたのはダンゴ虫だった。生きとし生けるもの全てを愛している千里は、弾き飛ばすことなく手のひらに取って、小一時間いじり続けていたのだ。そこへやって来たのが鼻水垂らしたガキ大将だったのである。

「で、なあに？　阿部くん」

「おまえ、気持ちわりいヤツだな。女のくせにダンゴ虫なんかいじって楽しいのかよ、ばあか！」

指差された先は、千里の白くて小さな手のひら。そこには少々の泥が付着しており、身体を丸めたダンゴ虫が転がっていた。なんて可愛らしい――そう思うのは無論、千里だけであろう。

「だって、こんなに可愛いんだよ！　見て、この子ね、『ダン子ちゃん』
っていうの。ほら、この背中の丸まり具合といい、色といい、もう可愛くって最高！」
一体、地球上にダンゴ虫の形状を可愛いなどと褒める人間が存在するだろうか――いや、千里の他にあと2人くらいは居そうな気がする。研究者とかで、うん。
そんな千里の発言に、案の定、阿部くんはドン引き。苦虫を噛み潰したような顔で、嫌悪を通り越し、拒絶反応を起こしそうになっている。
哀れ、阿部くん。
「――おまえ、頭、大丈夫かよ……」
その心配も当然である。しかしながら、千里の手に負えないところは、空想にふけってばかりいることでも、マイペースすぎて自己中心的な点でもない。
「――え？　この間やった国語・社会・算数・理科のテスト、全部百点だったよ？」
「――嘘だろ！　おまえ、どっからどう見ても馬鹿にしか見えねえじゃん！」
失礼な言い草である。――え、展開からして普通、馬鹿だろうって？
常識の通用しないのが浪漫千里であります。それに、馬鹿と天才は紙一重、うむ、納得。
「それで、何か用？　遊んでくれるのぉ？」
気の抜けるようなのんびり口調。今度はダンゴ虫を自分の腕に登らせて楽しんでいる。その瞳は、心底ダン子を愛でるものだった。
阿部くんはすぐさま逃げ出したくなった。お母さんに泣きつこうにも、ここは学校。すんでのところでこらえ、捨て台詞を吐いた。
「ばーか！　誰がおまえなんかと遊んでやるか！　独りでダンゴ虫でも

いじくってろ！」
特に阿部くんの言葉にはダメージを受けない千里。ひらひらと手を振りながら、うん、じゃあね、と阿部くんの背中を見送った。
阿部くんはちょっぴり傷ついた。ここまで人間の言葉が通じない相手
は初めてだったからだ。
「ダン子ちゃん、私のお家来る？　バナナ食べようか！」
ハンカチに包まれ浪漫家にやって来たダン子は、その日のうちにお母さんに捨てられた。

●青木さん●

●青木さん●

「浪漫千里、十二歳。趣味は妖精さんとお話しすること、特技は、どんな生き物とでもすぐにお友達になれることです」

――そんな意味不明、しかも明らかにウケを狙ったとしか思えない自己紹介で、クラスメイトの度肝を抜いた千里は学校内で有名となっていた。良い意味で？　いや、うん。おそらく良くはない意味で。

いつのまにか月日は流れ、季節を生き物や妖精と過ごしてきた千里も、いよいよ中学入学を迎えた。クラスの課外授業としてお花見をするなど、彼女にとっては楽しみなことこの上ない行事ばかり。だから千里は中学校が好きだった。

「ねえ、浪漫さん？　一緒に図書室で勉強しない？」

そう声をかけてくれたのは、同じクラスで、ななめ前の席に座る青木さんだった。ちなみに隣の席は縁があるのか阿部くんである。可哀相に。

「勉強？　なんの勉強をするの？」

きょとんとする千里に少々驚きつつも、青木さんは五時間目に漢字テストがあることを説明した。範囲はめっぽう広く、漢字ワークの十ページ分ほどの量が出されるらしい。

「だから、一緒にどうかなって思って――」

「うん、いいよぉ、でも私、勉強ってどうやるか分からないの」

はい？　青木さんでなくとも首をかしげる発言だろう。パードゥ

ン？　さりげに帰国子女の青木さん。英語の授業はまだ二回しかやってないが、千里はその意味を理解した。やはり千里は知能が高い。
「――どういう意味？」
そのままの意味です。千里は生まれてこのかた、『勉強』というものをしたことがない。小学校の頃から、テスト前日になっても教科書すら開かず、ひたすら妖精さんと話し続け、うるさい！　とお父さんに注意されても毛布にくるまって笑っていた少女である。
「授業中、ノート取ってないの？」
「ノート？　ノートってなぁに？」
――お宅のお子さんが個性的で常識はずれなのは充分すぎるほど分かりましたから、せめて『ノート』くらいは一般常識として教えてあげましょう。通知表に書かれること必至。
「――じゃあ、テストの時っていつもどうしていたの？」
「妖精さんが答えを教えてくれるの！　ここは四だよ、とか、太平洋戦争だ、とか。耳元でこっそり教えてくれるから、先生にも怒られないし」
凡人には理解不能であります。千里いわく、ずいぶん頭の良い妖精だとか。先生に怒られない云々より、そもそも他人には見えないのだからバレることはない。三年前、ダンゴ虫と戯れていた時、テストが百点だったと言っていた理由がようやく解明されたわけだ。
「そうなんだぁ……ねぇ、じゃあ私に勉強教えてくれる？　図書室は読書もできるし、行って損はないよ？」
それを聞いて千里は目の色を変えた。これは誰もが知っている話だが、千里と言えば読書家としても名が知れている。――え、初めて聞いた？　世界は意外と広いっていうことだ、うん。
「うん、行く。本読むの、好き」
入学してから千里は、教室か中庭を往復してばかりいる。それ以外の場所は授業以外に出歩くことはない。廊下を歩くことも滅多にない。移動教室もいつのまにかそこに座っているのだから、やはりワープできるほどの能力を秘めているのではないかと囁かれている。

だから図書室にも入るのは初めてだった。
「浪漫さん、妖精が見えるって本当？」
廊下を歩きながら、おそらく学校中の人間が質問したいであろう問題を、青木さんは口にした。実際、それくらいしか会話のネタがなかったのである。
「うん、本当だよ。白いワンピース着ているの。――今も私の肩に乗っているんだ。どうして皆には見えないのかなぁ？」
そんなまさか幽霊じゃあるまいし、肩に乗っているなんて表現は恐ろしい。しかし、青木さんはだいぶ慣れたのか、羽は羽毛のような感じなのかと続ける。
「ううん。どっちかっていうと――そう、トンボみたいな羽。透けてて、キラキラしてるの。四枚あって、それで自由にお空を飛んでるの」
――妖精のイメージがトンボになってしまったことは言わないでおこう。
「私には見えないかな？　一度でも見てみたい」
勇気あるな、青木さん。私は見たいとは思わない――人間でなくなってしまう気がするぞ。
「うーん――私以外に今まで見えた人がいないから、よく分からないなぁ――ねぇ妖精さん、青木さんにはあなたが見えないみたい。どうして？」
困った時には妖精さん。おそらく千里は、どんな悩みも彼女に相談して乗り切ってきたのだろう。というより千里に悩みがあったのか――レストランでの注文決めだとかそんな類だろうけども。
「――そっか、わかった。あのね、青木さん。妖精さんがね、私とお友達になれば見えるって」
おおっと、恐ろしい提案だ、妖精さん。実を言うと、千里には友達が居ない。妖精は親友だが、人間の友達は誰一人として居ない。なぜか阿部くんは幼稚園からの付き合いというだけで、自分が千里の友達だと思い込んでいるらしい。ちなみに千里はそう思っていな

い。哀れ、阿部くん。
「うん！　友達になろうよ。ずっとそうなりたいって思ってたんだ」
「じゃあ、今から『オトモダチ』！　妖精さんに会えるね」
「あ！　今浪漫さんの肩に何か見えた！　もしかして妖精さん？」
――こうして、ふたりは生涯親友として付き合っていくことになる。しかし、一番厄介なのは――。
「ねえ妖精さん、好きな食べ物は何――？　え、メロン？　私も大好き！」
すごいぞ、青木さん、すっかり不思議ちゃんになってしまった。
千里と同類――いやしかし、千里はもう寂しくないだろう。
――『親友』が二人も居るのだから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2618c/

孤独なロマンチスト

2010年10月21日20時20分発行